

報告 ペットコースを振り返る

櫻井 秀樹

Sakurai Hideki

1. はじめに

2010（平成22）年4月、鈴鹿短期大学（現鈴鹿大学短期大学部）生活学科の生活学専攻内に生活コミュニケーションコースが設置された。

本コースは、養護教諭2種、栄養士、保育士、音楽療法士2種などの資格取得を目指す他専攻・コースとは異なり、コミュニケーションをキーワードに、人と人、人と動物、人と社会・情報といったさまざまな関わりにおいて、総合的人間理解の形成を目指すカリキュラムが検討された。

2011（平成23）年4月、生活学科を生活コミュニケーションに学科名を変更、生活学専攻を生活コミュニケーション学専攻に専攻名が変更された。2012（平成24）年4月に、庄野キャンパスから郡山キャンパスに移転し、鈴鹿国際大学（現鈴鹿大学）と同じキャンパスになり、2015（平成27）年4月には鈴鹿国際大学が鈴鹿大学に名称変更され、鈴鹿短期大学は鈴鹿大学短期大学部として大学とより一体化し、新しいスタートを切った。この時、生活コミュニケーション学専攻のコース名を変更し、養護教諭・福祉コースは養護教諭・音楽療法士コースに、生活コミュニケーションコースはペットコースに名称変更し、より一層の充実をはかった。

2017（平成29）年度に鈴鹿大学こども教育学部が設置され、鈴鹿大学短期大学部生活コミュニケーション学専攻は養護教諭養成を新学部に移し、ペットコースは学生募集停止となった。獣医学部以外でペット動物を専門に学ぶことができる大学は、帝京科学大学、千葉科学大学、ヤマザキ学園大学、日本獣医生命科学大学といずれも関東圏の4年制大学だけである。筆者は、日本で唯一ペット動物を学ぶことができる短大

のペットコースが地域に受け入れられ、定着することを期待し努力してきたので、ペットコース学生募集の停止は残念でならない。

大きな教学改革の流れの中で、ペットコースも変化に対応してきた。ペットコース2年生2名が在籍中であるが、ここで一度、ペットコースの7年間を振り返りたい。

2. 教育研究上の目的と教育目標

鈴鹿大学短期大学部の教育研究上の目的は、享栄学園の建学の精神である「誠実で信頼される人に」に基づいて、広い視野を持ち、豊かな知識を身につけ、主体的、自立的な行動を通じて、国際社会、および地域社会で他の人々と協力して活躍する人材を育成することである。生活コミュニケーション学科の教育目標は、建学の精神の具現化に向けて、「人間形成教育」「理性と情緒の調和」を教育活動の指針に置き、「心豊かな専門職業人材」を育成することである。

生活コミュニケーション学専攻の教育目標は「養護教諭、音楽療法士、動物専門職として信頼される人間性を培う」「養護教諭、音楽療法士、動物専門職に必要な専門知識・技術を育成する」「他者と協力して問題解決しようとする態度を育成する」「他者に正しく伝えることができる自己表現能力を育成する」とし、この教育研究上の目的と教育目標に基づき3つのポリシーを定めている。

3. 3つのポリシー

ペットコースの3つのポリシーを次のように定めた。入学者受け入れの方針（アドミッションポリシー）は「生物、国語等の基礎知識を

有している人」「自然、人間、動物に関する知識を得ることに積極的な人」「コンパニオン・アニマル（伴侶動物）との共生社会づくりに使命感がある人」「他者とのコミュニケーション能力を持ち、さらに高める意欲がある人」「人と人や、人と動物のふれあいで相手の気持ちに共感できる人」

教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）は、「コンパニオン・アニマル（伴侶動物）に関する基礎知識・技術を育成する」「自然、社会、人間、動物などに関する知識を深め、主体性を育成する」「多様な人びとと理解しあえるコミュニケーション能力を育成する」「コンパニオン・アニマルにたずさわる者として必要な自己表現能力を育成する」

このようにカリキュラムポリシーを定め、必要な授業、演習、実習科目を配置した。

卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）について、専攻・コースごとに土台となる力「学力」、生きる力「問題解決能力」、つながる力「コミュニケーション能力」について示しており、ペットコースのディプロマ・ポリシーは、土台となる力「ヒトと動物を含む環境や社会一般に関する知識を有すること」「パソコンによる情報管理能力および動物への飼育・ケアの技能を有すること」、生きる力として「ヒトと動物の関係における課題に対し、解決への道を考える能力を有すること」「動物の飼育に必要な公衆衛生知識を持ち、実践能力を有すること」、また、つながる力では「他者を尊重し、他者と協働するためのコミュニケーション能力を有すること」「専門性を活かし自らキャリアを開発し、社会に貢献しようとする姿勢を有すること」とした。

4. 学生数の推移と卒業後の進路（表1、2）

生活学専攻生活コミュニケーションコースとして2010（平成22）年4月にスタートしたペットコースは、2016（平成26）年度まで旅行業務取扱管理者資格を取得し、旅行業の就職を目指すヒューマン系と、ペット動物について

学ぶペット系の学生を募集した。新コース1年目は生活コミュニケーションコースに4名の学生が入学したが、3名がヒューマン系でペット系は1名であった。ペット系を希望していた1名も、入学後にヒューマン系に変更し、生活コミュニケーションコースのペット系初年度の学生はいなかった。2011（平成23）年度の生活コミュニケーションコース入学者は5名で全員がペット系だった。2012（平成24）年度は12名（うちヒューマン系1名）が入学した。

専攻募集定員40名の半数20名を生活コミュニケーションコースの募集目標とし、募集活動を行ったが、2013（平成25）年度7名（うちヒューマン系2名）、2014（平成26）年度、7名（全てペット系）で目標に至らなかった。2015（平成27）年度は14名とこれまでで最も多くの学生が入学した。ペットコースとして募集活動ができるようになった2016（平成28）年度の入学者は3名であった。

本コースは、愛知県から3名、和歌山県、岐阜県、静岡県より各1名と県外からの入学者割合が比較的高く、県外からの入学者は皆、短大ホームページを見て、オープンキャンパスに参加し入学を決めていた。

52人の入学者のうち8人が退学（退学率15.4%）という高い退学率については、退学した学生それぞれに複数の理由がある。その主な理由として、対人（友人）関係、経済的事情、コースのカリキュラムや目指す資格が思っていた内容と違った、入学後に希望進路が変わったなどが挙げられる。最も大きな理由であり、退学した学生に共通する理由は友人関係であると思われる。

最初は仲良くしていた友人と人間関係がうまくいかなくなった、あるいは自分から他人に話しかけることが苦手な友人ができない、周囲の人になじむことができず居心地が悪いということで、入学後、早々に休学し、退学となることもあった。他の専攻、コースでも同じような傾向があるかと思われるが、本コースは顕著であったように思う。

表1. ペットコース学生数と進路

入学年度	入学者数(うち男子)	就職者数	進学者数	退学者数
2010(平成 22)年度	4(1)	4	0	0
2011(平成 23)年度	5(2)	5	0	0
2012(平成 24)年度	12(1)	8	2	2
2013(平成 25)年度	7(0)	6	0	1
2014(平成 26)年度	7(0)	5	0	2
2015(平成 27)年度	14(4)	7	5	1
2016(平成 28)年度	3(0)			2
計	52(7)	35	7	8

表2. 卒業生の進路先

動物病院	7
ペットショップ(トリマー含む)	3
動物園	1
ペット葬儀社	1
進学	6
その他	24
計	42(名)

卒業後の進路については、動物病院7名、ペットショップ3名、動物園1名、ペット葬儀社1名で、卒業生の29%がペット関連に就職しており、6名(14%)が進学、その他24名(57%)である。進学先は鈴鹿大学(4名)、介助犬訓練士養成学校、職業訓練学校であり、その他は、医療事務、福祉施設、パチンコ会社、結婚式場、アルバイトなどである。また、その他には、ペットコースの山越非常勤講師のもとでドッグインストラクターを目指す卒業生もいる。

卒業生の進路については、今回卒業後に就職した動物病院から別の動物病院に再就職したり、トリマー専門学校を経てペットショップトリマーに、あるいはペットショップアルバイトから正社員に採用されたなどである。現時点で卒業

生本人から直接聞き取りできた範囲でまとめているが、今後さらに詳しく調査したい。

5. カリキュラム

生活コミュニケーションコースを新設する時、資格取得にこだわらず、コミュニケーションをキーワードに、人と人、人と動物、人と社会・情報などといったさまざまな関わりにおいて、総合的人間理解の形成を目指すカリキュラムが検討されると先に述べた。しかしながら、受験生の資格取得に対する需要に応じるため、生活コミュニケーションコースの設置当初、ペット系では所定の科目の履修とD.I.N.G.O.のテストに合格することで与えられるプロスタッ

フ、ドッグケアテイカー、アシスタントインストラクター、インストラクターを取得できるカリキュラムが組まれた。また、所定科目の修得により本学認定資格として、飼主認定、トレーナー認定、ドッグ・アドバイザー認定資格を設けた。

ペット系の授業はペット概論〔動物関連法規と基礎獣医学〕を筆者と十津准教授が2010（平成22）年度から2011（平成23）年度まで担当、十津准教授退職後の2012（平成24）年度からは筆者と外部講師の須藤獣医師が2016（平成28）年度まで担当し、2017（平成29）年度は筆者が担当している。

ペット生活論〔コンパニオン・アニマル（犬）との暮らしを考える〕、ペットコミュニケーション学Ⅰ〔コンパニオン・アニマル（犬）の歴史、本能、学習原理、ボディサイン〕、ペットコミュニケーション学Ⅱ〔コンパニオン・アニマルの行動と学習についての基礎理論〕、生活コミュニケーション学演習Ⅰ〔犬のQOLを高めるためのハンドリングの基礎〕、生活コミュニケーション学演習Ⅱ〔家庭犬に必要なモチベーションエクササイズ〕、生活コミュニケーション学演習Ⅲ〔基本的な犬の管理ハンドリングの技術を学ぶ〕、生活コミュニケーション学演習Ⅳ〔ドッグスポーツの体験により犬との共同作業を通して細やかなコミュニケーションスキルを使い課題をこなす〕、生活コミュニケーション学演習Ⅴ〔ドッグトレーナーのアシスタントを体験する〕、生活コミュニケーション学特殊講義Ⅲ〔アシスタントの役割を学ぶことを通してコミュニケーションとサービスを考える〕、生活コミュニケーション学特殊講義Ⅳ〔インストラクションとプレゼンテーションの技術を学ぶ〕、生活コミュニケーション学特殊講義Ⅴ〔犬のエクササイズの知識とボディサイン〕、生活コミュニケーション学特殊講義Ⅵ〔犬の問題行動の予防と解決の方法を学ぶ〕、アニマルセラピー〔人と動物の関係学、動物介在活動〕を山越特任助教（現非常勤講師）と松本非常勤助手が、2014（平成26）年度から2016（平成28）年度までは山越特任助教（現非常勤講師）と金丸非常勤助手が

担当し、2017（平成29）年度は山越非常勤講師が担当している。

これらペット関連の専門授業、演習に加え、生物学や心理学、語学などの基礎教養科目と、もともと養護教諭2種免許を取得する学生のために開講していた解剖学及び生理学、微生物学、免疫学、衛生学及び公衆衛生学、薬理学などの専門科目、さらに情報処理や福祉、キャリアに関する授業、演習があり、幅広い学びができることが短大ならではのメリットである。

2011（平成23）年度、生活コミュニケーションコースの入学者は5名で全員がペット系を希望する学生であったが、家庭犬インストラクタートレーナーを希望する者はいなかった。学生募集活動、高校訪問のなかで家庭犬インストラクタートレーナーの資格を取り、ドッグトレーナーを目指すコースであることをオープンキャンパス参加者や高校の進路指導担当者に説明すると、興味を示してはくれるものの、入学には結びつかず、ペット系の資格としてはトリマー資格について質問されることが多かった。三重県内の高校生がペット関係で進学先に選ぶのはトリマーまたは動物看護師のコースがある県外の大学、専門学校であり、本学生活コミュニケーションコースに目を向けさせることは非常に困難であった。

また、短大2年間でD.I.N.G.O.認定資格の家庭犬インストラクタートレーナーを取得し、資格を活かした就職を目指すという最初の構想は、高度な専門性を必要とする分野であるため、ペットトリマーや動物病院、ペットショップ、ペットホテルなどへの就職を希望し、入学した学生にとってはかなりハードルが高いものであった。家庭犬インストラクタートレーナー資格を希望する学生を募集するには、いかに県外から多くの学生を集められるかが課題となったが、これは県内の学生を育て、県内で就職させるという短大の方向性と一致しなかった。

そこで、2012（平成24）年度からは家庭犬トレーナー養成からペット関連就職を幅広く目指すことのできるカリキュラムに一部変更し、2013（平成25）年度からは動物看護学〔動物

病院の業務と動物看護師の役割の理解、看護対象動物の特徴を学ぶ」と動物看護学実習〔ペット動物の日常健康についての知識と実践から動物病院の業務に必要な診療補助技術〕を筆者が担当した。2014（平成26）年度からは津市でペットサロンを経営し、トリマー養成専門学校校長の経歴を持つ田中由美子非常勤講師が、2016（平成28）年度までトリミング演習〔ペット動物の日常手入れとグルーミング、ペット美容〕を担当した。2017（平成29）年度のトリミング演習は筆者が担当している。

2014（平成26）年度にはJKC（ジャパン・ケネル・クラブ）でドッグショーの審査員を務め、岐阜県でポメラニアン専門犬舎を運営する

草間理恵子先生がコース顧問となり、生活コミュニケーションコース（ペット系）の今後の方向性について何度も検討を重ねた。犬と共生する社会を目指し、犬や他のペット動物についての理解を深め、県内動物病院やペットショップなどに就職するという方向性ができつつある中で、今後、受験生に強くアピールできる資格としてJKC認定のトリマーC級の導入を試みたが、一部これまでのコースの教育内容と整合性のとれない点について調整が難航した。その調整中にペットコース学生募集停止が決定した。

表3. ペットコース学生のインターンシップ先

年度	インターンシップ期間	学年	業種	インターンシップ先
2011（平成23）年度	9月5～7日	1年生	ペットホテル	ドッグスクール マオ
	2月12～18日	1年生	動物病院	なるかわ動物病院
		1年生	ペットホテル	ドッグスクール マオ
		1年生	動物病院	河村ペットクリニック
2012（平成24）年度	8月2～7日	2年生	動物病院	なるかわ動物病院
	9月11～17日	2年生	動物病院	野口動物病院
	9月1～10日	1年生	動物病院	ルナ動物病院
	9月1～10日	1年生	ペットホテル	ブーチーズ
	9月7～11日	1年生	動物病院	いせしまペットクリニック
	3月25～31日	1年生	動物病院	アスカ動物病院
	3月16～24日	1年生	ドッグカフェ	ドッグカフェサロン フランヘン
	3月11～16日	1年生	動物病院	羽島動物病院
	3月7～10日	1年生	ドッグトレーニング	ドッグ&オーナーズスクール ワンライフ
2013（平成25）年度	9月9～13日	2年生	動物病院	河村ペットクリニック
		2年生	動物病院	村田動物病院
	8月30日～9月3日	1年生	ペットショップ	(株)動物館アイドル3ペットヴィレッジ・シーバ店
	8月28～31日	1年生	動物病院	おかはな動物病院
2014（平成26）年度		1年生	動物病院	いせしまペットクリニック
		1年生	ペットショップ	ワンラブ イオンタウン津城山店
		2年生	動物園	大内山動物園
		2年生	動物病院	山添動物病院
2015（平成27）年度		2年生	動物病院	ユーカリ動物病院
	9月8～12日	1年生	動物病院	野口動物病院
	8月10～13日	1年生	トリミング	ポメラニアン専門犬舎 ミリオンセラーズ
	8月10～13日	1年生	トリミング	ポメラニアン専門犬舎 ミリオンセラーズ
	9月7～11日	1年生	ペットショップ	ペットショップCOO&RIKU 津高茶屋店
	8月18日～22日	1年生	動物病院	河村ペットクリニック
	9月7～11日	1年生	ペットショップ	ペットショップ 犬の家
	8月17～21日	2年生	ペットショップ	ワンラブ イオンタウン桑名西方店
	8月	2年生	動物病院	北川動物病院
	8月	2年生	動物病院	鈴鹿動物病院
	8月17～21日	2年生	動物病院	イズマ動物病院
	8月17～21日	2年生	ペットショップ	ワンラブ イオンタウン津城山店
	2月	1年生	動物病院	森動物病院
				ペットショップ (株)AHB(イオンPet Plus)
			介助犬訓練センター	シンシアの丘
			動物病院	石田動物病院
			動物病院	とよさと動物病院
3月	1年生	動物病院	アスカ動物病院	
3月	1年生	ペットショップ	ペットショップCOO&RIKU 四日市店	
2016（平成28）年度	8月30日～9月3日	2年生		社会福祉法人 朋友(Cotti菜)
	9月5～9日	2年生	動物病院	小林動物病院
		1年生	水族館	南知多ビーチランド

6. インターンシップ (表3)

本学におけるインターンシップの取り組みは、平成21年度大学改革推進補助金(大学改革推進事業)に「大学教育・学生支援推進事業」(就職支援推進プログラム)として応募し、採択され補助金の交付を受け、効果的なインターンシップのためのキャリア講座の拡充を目指して本格的に取り組まれるようになった。

学生が希望するインターンシップ先での研修の実施に向けては、担当職員が学生と事前面談を重ね、マッチング作業を行い、また、筆者や山越非常勤講師と情報共有しながらインターンシップ先が決定される。担当職員は受け入れ先と交渉を行い、受け入れが了承されると、インターンシップに関する覚書を締結し、詳細については事前訪問し確認される。また、インターンシップ中には教職員が研修先を訪問し、インターンシップ先の責任者との面談により状況確認を行っている。担当職員の入念な準備のおかげで、これまで大きなトラブルなどなくインターンシップが行われている。

ペットコースの学生は、動物病院で働きたい、介助犬訓練士になりたいという明確な目的をもって入学する者もいるが、このような学生は少ない。動物が好きで動物に関わる仕事がしたい、しかし、具体的にどの職業を選べばよいか、自分が何に向いているのかわからないといった学生がほとんどであった。また、アルバイトなどの社会経験が少ない学生も多くみられ、インターンシップに行きたいが、自信がないので2年生になったら行きたいと尻込みする学生も多かった。

ペットコースは本学の他専攻・コースのように教育実習や保育実習など学外での実習がなく、時間割も比較的余裕があるため、1年生の夏休みから積極的にインターンシップに参加するように指導してきた。まだ自信がないという学生にも、とにかく1日でもいいから見学してきたら良いと言って背中を押した。

表3にこれまでのインターンシップ先をまとめた。ある学生は、2年間で4回、全て異なる

内容のインターンシップ先で研修することで自分の適性を知ることができ、動物病院に就職した。入学時に動物病院で働きたいと言っていた学生は、1年生と2年生の2回のインターンシップ先の動物病院に就職した。

動物病院で犬の手術を見学し、気分が悪くなり、見ていられなかった、自分には動物看護師は向いてないと分かったとあって、進路変更し、医療事務に就職した学生もいる。インターンシップ期間終了後に、インターンシップ先からアルバイトで来てほしいといわれ、卒業までアルバイトを続けた学生や、2年生後期は授業のない平日と土日に自主的に研修を続けて就職につなげた学生もいた。行動力があり、主体的学習意欲のある学生はインターンシップ参加により、その後スムーズに就職活動を行うことができていたと思われる。

このようにインターンシップが就職活動にリンクするメリットは大きいですが、それだけでなく、インターンシップに参加した学生はその後、短大での学習や行事、クラブ・同好会活動などにも積極的な態度がみられる場合が多く、こうした学生の成長は、社会に触れ、現場を見てきたことで、今、短大で学んでいる内容がこの後どのように活かされるのかを理解できたからであろうと考えられた。

7. おわりに

バブル経済期以降、過熱するペットブームの陰で、全国自治体の動物管理施設では、現在でも多くの犬猫が殺処分されている。この不条理な現実が徐々に社会問題として広く認識され始め、多くの人々に高い関心をもたれるようになった。現在では、全国的に犬猫の殺処分0となるような動物愛護管理のさまざまな取り組みがなされるようになり、三重県でも動物愛護管理をより一層推進するために2017(平成29)年度より三重県動物管理事務所が新築整備されたところである。

筆者は、獣医学が専門であり、人と動物が安全で快適に共生する社会の実現のために、社会

貢献できる人材を育成するペットコースでの教育にやりがいを感じている。ペットコースは2018(平成29)年度より募集停止となったが、これまでのペット動物や動物愛護について積み重ねてきた授業研究や調査の成果は、今後も本学の学生や地域の方々に伝えていきたい。

また、課外研修、同好会・ボランティア活動、公開講座、動物愛護ミニシンポジウム、履修証明プログラムなどペットコースの取り組み、学校犬など、今回、報告できなかったことについては、今年度2名のペットコース学生を送り出したところで、卒業生の進路調査結果を加筆し、次の機会に報告するつもりである。